

事例1「森におばけがいるよ！」

(3歳児が自分なりにイメージをもち、表出して遊べるようになった時期)

人的環境としての保育教諭等の役割を意識し、 遊びの中で大切にしたい体験に応じて、環境を構成する

3歳児の頃は、人的環境である保育教諭等の存在が大きく、保育教諭等と一緒に活動することで、安心して活動に取り組みたり、活動の幅が広がったりする園児も多くいます。また、3歳児は、他の園児と遊んでいても、一人一人が個々にイメージをもって楽しんでいることも多い時期です。保育教諭等は、それぞれのイメージを大切にしながらも、中継点となって園児同士をつなぎ、皆で楽しんだという感覚がもてるようにすることが大切です。

事例は、広い園庭と園庭の中に森があるという特徴をもった園です。その特徴的な園庭の自然の中で、園児が諸感覚を使い、自然物などを見付けたり、見付けたものに関心をもち「何だろう」と不思議に思ったりする体験ができるようにしたいと願っています。また、自然は豊かにイメージを膨らませてくれます。保育教諭等は自然と様々な形で出会うことができるように、自然物と園児をつないでいく必要があります。そのためにイメージを広げるきっかけになるようなものを用意することも大切です。

園庭の環境と園児の遊び

園庭の隅には「夢の森」と呼んでいる木が茂った一角がある。以前から、「森探検」と称して、園児と担任でその一角を探索していた。大人にとっては木の隙間から園庭も見通せる小さな森なのだが、3歳児にとっては、暗くて奥深い大きな森だと感じるようで、探検していても「魔女がいる」「イノシシがいる」などイメージが膨らむ場所である。

10月、運動会后、いつものように森探検をしている最中、枯れた枝が垂れ下がった木を見付け「コウモリみたい」、節が目のように見える木を見て「目の木怖い」と言い始める。それがきっかけになり、園児たちは「森の中におばけがいる」というイメージをもち始めた。それから、毎日のように園児たちは、森探検に出掛けた。

遊びの様子

この日も朝からA児に促され、担任と8人の園児で森に行く。

B児が「この木はおばけにとげとげにされちゃったんだ」と、とげがある木を見付け指差す。担任は「そうなの？おばけのせいなのね。怖いね」と応える。B児が「とげがあるから、この木はとげとげの木」と言うと、それを聞いていたC児は「この木はおばけにコブを付けられた」と言った。担任は「じゃあこの木は、コブの木かな？」と応える。

D児は、木に付いている傷が顔に見えた様子で「見て！この木、ペンギンの顔に見える」と言った。するとE児が「この木はペンギンの木」と言う。そばにいたF児は、同じ木を指差して「ウサギに見える。ウサギの木じゃない？」と聞いた。担任は「そうだね。ウサギにも見えるかな？ペンギンの木にしようかな？ウサギの木にしようかな？」と応える。

遊びから捉えた園児の姿と担任の保育教諭の思い

一人の園児の「おばけ」というイメージが、周囲の園児に派生して、木の特徴に気が始めました。担任がそれを受け止め、言葉にして返したことで、そばにいた他の園児もそれぞれ口々に様々なイメージから木に名前を付ける様子が見られました。

でも、そのイメージは共有されているものではなく、同じ木を見て違う名前を付ける園児も見られます。担任が焦って「共有されれば面白い遊びになりそうだ」と思い、まとめたり決めたりするのではなく、今はそれぞれの園児が自分のイメージで楽しむことを大切にする時期ではないかと考え、丁寧に園児一人一人のイメージを受け止め返していくことにしました。

園児の理解を基にした環境の構成と園児の姿

担任は、園児一人一人が探検隊になりきって森探検を楽しめるように、トイレットペーパーの芯とりボンテープを用意しておいた。園児は、トイレットペーパーの穴をのぞいて、望遠鏡にしたり、2つくっ付けて双眼鏡を作ったりし、それを誇らしげに胸に下げて、森探検をする姿が見られるようになった。そのうち、おばけと戦うための武器を作ったり、採った草花を入れるバッグを持ったりして森探検を楽しむ姿も見られるようになった。

その後の遊びの様子

1月になったある日、森探検の中で、突然B児が「先生、おばけが木に悪いことするのはお腹が空いてるからじゃないかな？」と言った。担任は「お腹が空いちゃうと悪いことしちゃうの？」と聞いた。B児が「だからさ、おばけが悪いことしないように、おばけの好きなものをあげるといいんじゃない？」と言うと、そばにいた園児たちは「そうだよ」と口々に賛同する。担任が「おばけの好きなものってなあに？」と聞くと、園児たちは「お菓子とか？」「アイスクリームかな」「ゼリー」などと、それぞれ自分が好きなものを言う。

担任の保育教諭の思い

保育教諭

園児のイメージが、違う方向に広がってきました。このイメージを聞き流してしまってもいいのか、実際にお菓子などを置いてみた方がいいのか……。担任は、この園児たちのイメージにどこまで添ったらよいのかと悩みました。でも、ここまで園児が楽しく遊んできたので、園児のイメージを受け止めてみることにしました。

翌日、担任はカップのゼリーを用意し、園児たちと森へ出掛けると、一番太い木の下に置くことにした。園児たちは近くにある花や草を摘んできて一緒に置いた。

その日の園児が帰った後、担任は、ゼリーを食べ、空っぽのカップを同じ木の下に置いておいた。

次の日の朝一番に森に行った園児が、「先生大変、ゼリーがなくなってる！」と報告したことで、保育室中は大興奮となった。担任が「みんなで森に行ってみる？」と言うと、園児たちは「行く、行く」と言い、10人以上でぞろぞろと森へ行った。園児たちは「ゼリーがなくなってる！」「おばけが食べたんだ」「おばけはこれで悪いことしなくなるね」「今日もあげたらいいよ」「今日は、あそこになってるミカンを置いたらどう？」「ぼくはチクチク（松の葉）を置いてみる。きとおばけ怖がるよ」などと口々に話した。

今まで、それほど森探検に興味をもっていなかった園児たちも加わって、森のおぼけの存在は、園児の中で大きなものとなっていきました。ゼリーだけでなく、森の中にある様々な自然物を置いてみるという遊びにも広がっていきました。

この遊びは、10月から3月まで続きましたが、その中で、園児のイメージは少しずつ共有されていきました。担任の保育教諭がまとめようとしなくても、次第にそれぞれの木は同じ名前と呼ばれるようになっていきました。担任の保育教諭は、この遊びの経過を絵本にまとめ保育室に置き、園児が見ることができるようになりました。

事例から読み取れること

【保育教諭等の存在が心のよりどころとなるようにする】

○3歳児にとっては、担任である保育教諭との信頼関係を築くことが何より大切です。

様々なものに取り組もうとするとき、何かあったら助けに来てくれるだろうと、安全基地として担任の保育教諭がいるからこそ、思う存分活動に取り組むことができるのです。中には、お化けを見に行きたい気持ちはあっても、ちょっと森は怖いと思っている園児もいたかもしれませんが、大好きな担任の保育教諭がいてくれることで安心感をもつことができました。そして、担任の保育教諭と自分たちで作ったイメージの世界を共有することを楽しみました。この活動を通して、より信頼関係が深まったとも言えます。保育教諭等は、園児にとって大切な人的環境です。

【園の中にある様々な環境を生かす】

○園によって、どのような場所にあるか、どのような立地条件にあるかなどは様々です。それぞれの園の特徴を生かした活動を取り入れていきたいものです。この事例は「夢の森」という豊かな自然がある園です。その豊かな自然環境を生かした活動を取り入れていきます。では、園庭が小さな園でこのような活動は望めないかということ、そんなことはありません。小さな自然物でも、不思議に感じたり、何かに気付いたり、発見したりすることは可能と言えます。今ある園の環境の特徴を生かすと同時に、その園ごとに工夫して園児たちが充実した活動ができるようにしていくことが大切です。

【自然物と園児をつないでいく】

○園児の周囲に自然物があればそれでよいということではありません。保育教諭等は、その自然物と園児をつなぐことが必要です。例えば、園児が木を様々に見立てていますが、保育教諭等がそれを受け止め、園児に返していくことで、園児はもう一度木をよく見て考えます。この繰り返しの中で、園児は更に深く自然と関わっていくのです。

【イメージが膨らむようなものを用意する】

○担任の保育教諭は、「園児がよりなりきって探検を楽しめるように、望遠鏡や双眼鏡があったら楽しいのではないか」と考え、トイレットペーパーの芯、リボンテープなどを用意しました。これによって、より園児のイメージは具体的になり、森探検が更に楽しいものになりました。また、担任の保育教諭は、どこまで園児のイメージに寄り添うべきか悩みましたが、ゼリーを用意したり、それを空っぽにしたものを置いておいたりなど、園児たちが喜ぶ演出もしてみました。それによって、園児の森への興味や関心はさらに深まっていきました。

【園児一人一人のイメージを大切にする】

同じイメージがもてれば、もっと楽しく遊べるのではないかと考え、思わず一つのイメージにまとめたくなることもあります。しかし、3歳児の頃は、複数の園児が同じ場において同じ遊びをしていても相互に関わりをもたずに遊んでいるなど、一緒に遊んでいるように見えても一人一人のイメージは異なっている時期です。一人一人が自分なりのイメージをもち、それを表出しながら楽しく遊ぶことを保障していくことを大切にしたい時期と言えるでしょう。園児一人一人のイメージを受け止めながら、イメージが広がるように働きかけていくことが必要となるでしょう。

【保育教諭等が橋渡しをしながら、他の園児のイメージに触れられるようにする】

保育教諭等はそれぞれのイメージを受け止め、言葉に表して返していく中で、周囲の園児に聞こえるようにしたり、巻き込んだりしながら、他の園児のイメージに触れられるようにしていくことも大切です。それが刺激となり、イメージが膨らんでいくこともあります。また、そのことが、園児同士の自然なやり取りにもつながっていきます。

【「皆で楽しんだ」という感覚がもてるようにする】

園児同士でイメージを共有しながら遊ぶことは、まだ難しい3歳児ですが、保育教諭等が橋渡しをする中で、ゆるやかな一つのイメージの中で遊ぶ姿が見られることもあるでしょう。

事例では、「森におばけがいること」「おばけが木にいたずらをして木がとげとげになったり、コブができたなど特徴的になってしまうこと」「おばけは置かれたものが好きなこと」など、園児たちの中で共有されていることがありました。しかし、イメージは一人一人違っていました。その中でも、皆で森探検をしたり、お供えをしたりすることで、「皆で遊んだ、楽しかった」と思えることが大切です。これが、今後、イメージを共有しながら遊ぶことの素地になっていくのです。

【3歳児なりに遊びを振り返ることができるようにする】

楽しい遊びを振り返ることができるような環境をつくっていくことも必要です。今回の事例では、3歳児ということもあり、「ゆめのもりのひみつ」という絵本を作ってみました。園児はその絵本が大好きで、よく見ています。これも、「皆で楽しんだ」という感覚をもつための一つの材料になっていくと考えられます。